

## 第30回石川建築賞 受賞作品

### 知事賞 いしかわ総合スポーツセンター

設計者：(株)池原義郎・建築設計事務所

施工者：清水・戸田・兼六・みづほ・近藤特定建設工事共同企業体



この施設は「緑につつまれたスポーツの殿堂」をめざして、長い歳月をかけて整備してきた西部緑地公園の一角に、最終段階として日本海側で最大級規模を有する室内スポーツ施設として建設された。

平面構成は国際レベルの室内競技や音楽コンサートなど多様な利用形態に対応できるよう、メインアリーナ、サブアリーナ、プールなどを直線上に配置し、ガラスの間仕切りで区切っただけの見通しよい競技空間を成し、一体的な大会運営も可能にしている。

全長230mの緩やかな曲線をもった大屋根で覆った施設でありながら高さを抑えて周辺への威圧感を軽減し、屋根の形状から風の流を感じさせ、巨大な建物が大地から浮遊しているように見せているところが高く評価された。

また施工面においては、設計者の意図していた遠望の山並みと呼応する大屋根から、どれひとつ同じサイズの鉄骨材がない複雑な構造を高度な技術力を駆使して成功させている点も評価された。

## 優 秀 賞 長池の家

設計者：谷重義行 + 建築像景研究室

施工者：(有)けやき住建 + ライフデザイン



郊外の農村が宅地化している敷地環境に計画されたこの住宅は、親世帯と子世帯、二つの住棟を渡り廊下でつないだかたちで建てられている。

計画にあたって既存の二棟の農作業小屋を残し、かつて農家に存在したニワと縁側の一体化した開放的な外部空間を再現しながら住棟が配されている。ニワに面してそれぞれ配することでお互いの距離感を形成し、同時に緩やかなつ

ながりをつくり、互いの気配を感じながら暮らせるように配慮されていて、それがうまく成功している作品である。

そして、4つの建物を絶妙にずらすことで、アプローチを兼ねるニワ先から見える各建物のヴォリュームは緊張感を生み、各棟の内部からニワへの眺めは現代的な農家的風景空間を醸成していて心地よい。

## 優 秀 賞 辰口町の家

設計者：吉島衛建築研究室

施工者：北国建設(株)



敷地は農村部に近い旧街道沿いに面し、自動車の行き来する喧噪さが気になる。このため接地性のある生活環境と決別し、生活拠点を2階レベルにあげた住宅である。これによって住宅と町並みとの関係を「柔らかに閉じる」という解を出している。

一方、日常の生活の場となるリビングとダイニングなどは一間つづきの、連続性のある「開いた」関係を創り出し

ており、明快なプランニングとなっている。このうちリビングはひとつの独立した箱を形成しつつ、ダイニングとの境には壁のなかに収納できる縦格子の建具を建て込むことができ、様々な生活のシチュエーションに応じて、この建具の開閉状況によって「場」の雰囲気を一変させる巧みな工夫が施されている。

建物の外観構成は1階の打ち放しコンクリートの箱に、全面ガラスと黒壁で構成する3つの箱が載る造形が採られ、周辺からは異彩を放っている秀作である。

## 入 選 主計町の蘆宅

設計者：(株)平口泰夫建築研究室 施工者：(株)田村



金沢市主計町の重要伝統的建造物保存地区のなかに立地するこの建物は、地区が定める修景規準に沿って表構えを改修し、内部は自由に改築した用途を変更したコンバージョン建築である。

この建物は昭和戦後に建てられ、地区の保存対象物件でもなく、表構えも今とは全く異なるものであった。

1階内部は伝統的意匠を現代的にアレンジしながら大胆な改修を行い、2階は伝統的な座敷空間を維持するよう改修を最小限にとどめ、上下階の空間的なメリハリをつけている。内外部とも質の高い伝統的な建物として再構築され、多用途に活用できる提案がされており、高く評価できる作品である。

保存物件でもなかった普通の町屋建築が、設計者の機知に富んだ創造力と修景規準を生かして創出したお手本のような秀作である。

## 入 選 浅野川をのぞむ家

設計者：金子早苗建築空間設計室 施工者：(有)丹保建設



卯辰山を背にした浅野川沿いに立地し、コンパクトにまとめられた若い世帯の住宅である。文字どおり浅野川を日常的にのぞむことができるよう、さまざまな視線の工夫を行っての室構成が高く評価された。

平面の基本構成は、1階レベルに主寝室と和室の子ども室、洗面・浴室を配し、2階レベルにリビング、ダイニング、ワークスペースを川側に平行して並べ、リビングとダイニングは外部テラスをつなぐ構成である。これは川を意識した配列であるが、各室をワンルームに近い空間とすることまた川かぜを受けて川との一体感を愉しむ家として好感をもって受け入れられる作品である。

## 入 選 「通りの間(多目的・緩衝空間)」のある家

設計者：アーキ・アーバン建築研究所 施工者：(株)丸喜建設



金沢南郊の山裾をとおり鶴来街道沿いに立地するこの住宅は高低差のある敷地に建てられている。住宅は一段高い場所に建てることで、街道からの騒音や上り坂からの視線を緩和している。

1階の平面構成は南向き玄関を介して、南面する「通りの間」と称する空間を媒体にダイニング、リビング、仏間などの部屋が接する。2階の4室の洋室はすべて南側に面する構成である。つまり南面重視の室構成を採っている住宅なのである。だが、この住宅が

高く評価されたところは「通りの間」である。ここは各部屋をつなぐ廊下の役割をもち、必ず通らなければならない場所で、家族の気配がいつでも感じられる空間を呈していること。軒を高くして床から軒下までガラスの開口をとり、陽光が溢れんばかりに注ぎ込み、季節の移り変わりによって自由に使い分けられる多目的な空間、言い替えれば、第二のリビングになっているところである。

## 特別賞 蔦屋漆器店

設計者：(有) 小林吉則建築計画室

施工者：中谷工務店



輪島市の中心市街地に位置するこの建物群は、商品としての漆器を置く店舗と漆器を製作する作業場とギャラリー、そして住宅からなる複合建築で、これらの空間が3棟に複雑にまたがって構成されている。

これらの建築群はまだ記憶に新しい能登半島地震によって大きな被害を受け、特に3棟の中央に位置する2階建ての塗師蔵(土蔵)はほとんどの土壁が崩壊するといった甚大な被害に遭っていた。この建築群は地震被害からの再生をめざした作品である。

作業場と倉庫を兼ねた塗師蔵は、新しい左官工法を採って耐震性を向上させ、ギャラリーとして機能転換を図ったが、蔵特有の空間を維持し、漆器店としての歴史的文脈を継承させた作品であることが高く評価された。

なお、この土蔵の再生をめぐる、地域住民や学生、遠くから赴いたボランティアの人々を巻き込んでの社会的取り組みに対して、意義深い活動であったことの称賛として、審査員一同の総意により特別賞の冠を付与した。